

6. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その49)】

和歌山県内之浦干潟のスナガニ類

和歌山県田辺湾の奥にある内之浦の干潟には、数種のスナガニ類が生息している。一番小さいのがチゴガニで、甲羅が1 cmほどしかない。干潮時には泥の上で、多数の個体がそろってダンスをしている(図)。暖かい時期にチゴガニはハサミ脚を勢いよく振り上げては振り下ろし、1分間に30回もこの行動を繰り返す。しかも数m四方の個体全部が、シンクロナイズにこの行動を行う。広い干潟全体でこのような光景が見られるのである。この見事なダンスの意味であるが、雄が見せる縄張りの誇示で、他個体への自己存在のテリトリーのアピールである。雌を誘う効果もあるという。



図. 内之浦干潟親水公園（田辺市新庄町）で、はさみ脚を振り上げるチゴガニ

2004年11月下旬、内之浦の干潟にはまだ無数の巣穴が見られ、干潮時には朝から活動している。しかし、ユニークなダンスはあまりしなくなってしまう。チゴガニは瀬戸臨海実験所水族館で周年ずっと飼育展示されている。ダンスが観覧者からよく見えるように、水槽のガラス面にはマジックミラーを張り付けて、チゴガニ側からは人が見えなくする配慮をしている。館内といえども、野外と同様、気温が下がると、やはりあまりダンスを披露しなくなる。

ハクセンシオマネキ

内之浦にはチゴガニよりもずっと大きいハクセンシオマネキがいる。白いハサミ脚を扇状に振って潮がさし込んでくるのを招いているようなそぶりを見せるところからこの和名がついた。体よりも大きく見えるハサミ脚を打ち振るうのは雄で、雌に対してみせるディスプレイである。わが国にいるシオマネキ類は、多くの種が沖縄方面に分布するが、種ごとにハサミ脚の形そのものも、色、その振り方も異なっている。たとえ数種が同じような干潟で暮らしていても、雌はその振り方で自分と同じ種の雄だとわからせる仕組みなのである。種内では、振り方のうまさで交尾相手を選んでいるようだ。

オサガニ類

シオマネキ類に類似するが、色がそれほど派手でなく、体もやや小さいヤマトオサガニやヒメヤマトオサガニも内之浦に見られる。交配実験などから奈良女子大学の和田恵次先生らが、ヤマトオサガニとされていた中に新種としてヒメヤマトオサガニを見出された。ヒメヤマトオサガニの腕振が万歳三唱の様子そのものなので、この新種を創設・記載される際に、種小名に腕振の特徴をもじって「banzai (バンザイ)」と名付けられた。これら2種とも京都大学白浜族館でチゴガニと並んで飼育展示されている。

